第13回日本赤十字看護学会学術集会

シンポジウム

看護技術の再構築
－身体・こころ・技術－

Reconstruction of the Nursing Art
：Body, Mind, Art

川嶋みどり　Midori Kawashima　（日本赤十字看護大学）

キイワード：身体、こころ、技術
key words：body，mind，art

「看護技術の再構築」に向かうここでのキーワードは、からだ・こころ・技術である。三人のシンポジストにより本テーマに迫って頂いた。阿保会長が述べられていたように、赤十字に限らず先人たちの工夫と経験により編み出された数多の優れた看護技術が忘れられたり使われなくなったりしている。その要因は幾つかあるが、１つは、自然科学的な検証に馴染まない故という阿保説に加えて、看護師自身が自己の経験を語ってこなかった。すなわち、言葉化してこなかったことがある。そして、もう１つの大きな要因としては、あまりにも機械化やIT化に依存して発展してきた現代医療のありように、ぴったり寄り添ってきた看護の姿勢というものを見ないわけにはいかない。人間の営みというのは、本来非常に非効率的であるにもかかわらず、その営みを支援する看護が効率化優先の波に乗って無批判的に歩んできたことにも原因があったと思われる。

そこで、本シンポジュウムは、看護技術の再構築をするために、からだところこと技術という切り口から迫るわけである。身体論を西村ユミ氏、こころ論を野間俊一氏、技術論を高田早苗氏に語って頂くことになった。三名の方の発言については、それぞれの稿を参照されたい。

これらの発言を受けてフロアからも活発なコメントや質問があった。字数の関係で詳細には述べられないので、以下にその概要をまとめておく。

１）患者に触れた時の手の感触にこだわり続けた看護師と、彼女をとりまく複数の看護師らの身体感覚の交流が、自覚していたわけではないが患者を見る共通の目となり、共同実践となって狭心症状の発見につながって問題対処に通じた例を中心の討論が行われた。

２）コミュニケーションの基礎でもある、人が人に会うとはどのようなことかをめぐって

「言葉であったり、身体表現であったりしながら色々なものが見えて来る」「全力投球で苦しんでいる患者さんのそばに、かなり近い距離でともにいることから相互にかなりの親密さが生まれて来る。それは、社会で普通の人と人とが出会う距離感よりもずっと短い距離である」。

「出会うということは、物理的に会うのではない次元がある。救急医療の現場で、殆ど意識のない患者さんに対してある処置を行う場合、患者さんと私たちってまだ出会っているという状況ではないことをよく体験する」

「受動と能動という面からの出会いがある。そこに居あわせるだけではない出会い」

3）看護教育や現場の中に浸透している用語と、それをめぐる思考や行為が看護技術の構築を妨げてはいないか。

「実習を終えて帰ってきた学生に、『病院に行ってきたの？実習が終わったの？』と問うと、『情報収集です』という言葉。まさにそこに象徴されているのが、患者との出会いのなさではないか。情報収集なんて言う言葉を、そんなに気楽に使われては患者はたまったものではない」とは、患者体験をされたばかりの大先達の発言であった。

また、「看護計画、看護過程というのを一番始めに教えて、常に、そこから始まります。この均一化が私たち、学生の感覚を劣化しているかもしれない。看護過程って本当にどのように教えているか。教材研究にしても、実習研究にしても、看護技術教育にしても、根本から考えないと、看護過程とか看護計画という言葉が一人歩きをして弊害を及ぼしている」。

看護技術の再構築に向かって、からだとこころと技術からアプローチして行く課題は、本学会が終わっても探究し続けて行かなければならないであろう。対象の問題や状況に相応しく表現する看護は、看護師自身の身体性にかかっていて、立ち位置から態度、物腰,表情や声のトーンに至るまでケアに相応しくあらねばならない。また、こころとこころとの関わりについても、その個人の感性や想像力が強く求められる。そうしたことをベースにして個々の看護師の技術水準を高めることを抜きに、看護が専門職として社会に承認されることは困難であることを改めて強く感じた次第である。